日本大学歯学部紀要 36，95-106，2008

グリムメルヒェンのモティーフを探る (9)
―グリムメルヒェンにおける神々とキリスト教の神―

満足　　忍

Studies on the motives in Grimm's Märchen (9)
―Gods in Grimm's Märchen and Christianity―

Shinobu Manzoku

はじめに

ヤーコプとウィルヘルムのグリム兄弟が収集した“Kinder- und Hausmärchen”（KHM）には，紀元前の自然宗教の痕跡や古代神話から生き続けてきた信仰心に基づく様々なモティーフと共にキリスト教の影響を受けていると思われる形象が多く投影されている。この民間メルヒェンがキリスト教的であるか否かに関しては，神学者や民俗学者をはじめとした広い分野で独自な見解が示されている。

多くの地域や時代を越えて伝承されたメルヒェンの中には宗教的な意味合いを持つ多種多様な基本行動が見受けられ，多くのモティーフが福音書や神話のものと類似している。しかし，キリスト教や原始宗教のモティーフが保持されている故にメルヒェンがキリスト教的あるいは宗教的であるのではなく，民間信仰の中に異教の要素やキリスト教の要素が融合・浸透しているが故にローマ・ギリシャの古代やキリスト教のモティーフがメルヒェンに受け入れられたと解釈するのが妥当であろう。

メルヒェンに取り入れられているキリスト教的な要素を解明するために，民俗学者や神学者などが古代信仰からの立証を試みたり，あるいはメルヒェンの中の個々の形象からキリスト教の啓示を探し求めたり，魔術的な自然宗教の痕跡や古代宗教のモティーフを探求してはいるものの，その関連は十分に解明されていない。メルヒェンの中にキリスト教的な要素が含まれているからこそメルヒェンが早い時期から布教活動の一部に取り入れらていたようであるが，超自然の力による不可思議さならびにモティーフの多様性を特性とするメルヒェンは，神を第一義とするキリスト教の内容とは本質的に同一であるとは考えにくい。

本稿では，Wilhelm Solms：“Die Moral von Grimms Märchen”（PRIMUS VERLAG, 1999）に収められている“Wie christlich sind die Märchen?”をテキストとして，グリムメルヒェンをキリスト教の福音と対立させたり同一視するのではなく，双方の共通性や関連性を検証してその概要を紹介する。なお，使用したメルヒェンの表題には国際的に用いられているKHM 番号を付記した。

「神」の慣用的表現

グリムメルヒェン集には様々な形態を持つ話が収集されているが，特に魔法メルヒェンは主にハッピーエンド型の形式をしており，神はそ

日本大学歯学部　ドイツ語
〒101-8310　東京都千代田区神田駿河台 1 - 8 -13
Nihon Universitiy School of Dentistry
1-8-13 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8310, Japan
（受理：2008 年 9 月 12 日）

れらの話の中では大きな役割を担っている。神が個別の単語で用いられている話，あるいは語り手によって引き合いに出されたり，神の名が告げられたりしている話は 42，神が人間などの実際の姿で此岸の世界に登場する話と合わせると 52 話であり，実にグリムメルヒェン集の全 200 話の 4 分の 1 にも及んでいる。

メルヒェン集の改訂作業の中心的役割を担ったウィルヘルム・グリムは，話に神を登場をさせることをまったく独自の考えで行ったのではなく，初版を見ると収集の段階ですでにその多くが含まれている。一方，彼自身も神のモティーフを大変好んだことから，改訂の度に他のメルヒェンにも転用し，多用したものと考えられる。「神」の語がどのようにメルヒェンの中で使用されているか，Solms の論文に分類されている主な例を挙げて解説する。

メルヒェンの主人公が逃げ場のない窮地に立たされると「おや，まあ！大変だ！」“Ach, Gott”（KHM 11，16，34，37，53，59，85，89），あるいは“Herrgott”（KHM 6）もしくは「気の毒に！」“Daβ Gott erbarm”（KHM 6）との嘆きの声を発している。一方，窮地から開放されると「ありがたい！やれやれ！」“Gott lob”（KHM 37）または“Gott sei gelobt”（KHM 6）あるいは“Gott sei Dank”（KHM 178）といった安堵の声を挙げている。また，若く美しい女性を目の当たりにしたり不可思議な体験をしたとき「おやまあ！滅相もない！」“Du lieber Gott”（KHM 13），“ei du, mein Gott”（KHM 26，53），“mein Gott”（KHM 99），“um Gottes willen”（KHM 31，110）の驚きの声を発している。それに対して相手への怒りの表現として「ひどい！」“gottlos”（KHM 5，9，12，15，25，36，81，161）の言葉が頻繁に使用されている。

「12 人の兄弟」（KHM 9）では，意地悪な姑が主人公の少女に「ひどい仕打ち」“gottlose Streiche”を行っており，「ちしゃ」（KHM 12）では意地悪な悪い魔女が「ひどい子だ」“gottloses Kind”と主人公の少女をなじっている。さらに「3 枚の蛇の葉」（KHM 16）では，「おや，まあ！」“Ach, Gott”という声を発するのは，よりにもよって後に自分の主人を殺害させる悪い姫である。「雪白とバラ紅」（KHM 161）では，悪い小人が「お構いなしに 2 人を食べておしまい」“die freβt in Gottes Namen”と熊に 2 人の姉妹を差し出している。「いばらの中のユダヤ人」（KHM 110）では，死刑台に送られた主人公の下男がこの世の別れにもう一度ヴァイオリンを弾くことを願い出た際に，語り手から悪者・泥棒の烙印を押されているユダヤ人が「とんでもない！滅相もない！」“um Gottes Willen”，“Gott bewahrt”と繰り返し叫んでいる。このようにウィルヘルムは魔女や小人など，主人公の行く手を阻む悪い者の発する言葉にさえも神を頻繁に登場させている。この場合，「神」という語は単に慣用的な言い回しとして意図もなく取り入れられたのではなく，パロディー的な意味合いで取り入れられたのであろう。しかし，神にまつわるこれほど多くの慣用的表現の使用は乱用であるとの批判も受けている。

「名付け親になった死神」（KHM 44）の中の以下の箇所でもウィルヘルム自身の顕著なキリスト教志向の一面が確認できる。

貧しい男が 13 番目の子供の名付け親を求め歩き，最初に出会った男が神であることを知ると，その申し出を「あなたを名付け親に頼むのはやめましょう。あなたは金持ちには沢山の物をおやりで，貧乏な者はひもじい目におあわせになる」“ich will dich nicht zum Gevatter, du giebst den Reichen und läβt die Armen hungern”と拒否し，2 番目に出会った悪魔の申し出も「あなたは人を騙したり，悪いことに引き込んだりするから」“du betrügst und verführst die Menschen”と拒んでいる。そして 3 番目に

出会った死神には「あなたは申し分のない人です。あなたは貧乏人も金持ちも区別せずに連れていきます」“du bist der rechte, du holst den Reichen und den Armen ohne Unterschied”と言って申し出を受けている。死神を名付け親にすることは古い風習からの伝承であり，メルヒェンモティーフとして大変馴染み深く好まれている。第2版では最初に出会った神の申し出を拒否する言葉の後に「この男がこんなことを言ったのも，神様がどんなに賢く，人々に富と貧しさとを振り当てておられるかを，知らなかったからです」“so sprach der Mann, weil er nicht wuβte, wie weislich Gott Reichtum und Armuth vertheilt”の注釈文が書き加えられている。キリスト教社会という当時の時代背景も影響して，ウィルヘルムのこの加筆には「万人は神の前では平等である」の教えに基づいた，神に対する聞き手の誤解や信仰心の妨げとならないことへの配慮が伺える。しかし，神の正当化を目的としたこの加筆はいかにも説明的であり，話の進展を重視するメルヒェン特性の形態からすれば不必要であると思われる。

「神」の引用による功罪

メルヒェンでは，単に驚きや怒りの際に神の存在を意識してその名を口にしているだけではなく，神の力を切実に求め，神の恩恵に感謝したり，語り手が神の援助を示唆している場合もある。この場合，神は主人公に幸福への道を示唆する者，救済のための支援を提供する道徳的な役割を担っている者として登場している。

本来異質で相容れないキリスト教的形象は，はたして超自然の力を有益に機能させるというメルヒェンの本質に相応しいのであろうか，あるいは異質で矛盾しているのであろうか？キリスト教的要素は，収集の段階ですでに存在していたのであろうか，あるいは増補・改訂を重ねていくうちに修正・加筆されたのであろうか？これらの疑問は，メルヒェン集の初版（1812年）に第2版（1819年）ならびに現在読まれている決定版（1857年）を対比させ，描写表現の変遷を見ることで一層明らかになると思われる。

「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 15)では，両親によって森の中に置き去りにされる前夜，兄が妹に「神様は僕たちを見捨てはしないよ」“Gott wird uns nicht verlassen”，そして次の夜には「きっと神様が僕たちを助けてくれるよ」“der liebe Gott wird uns schon helfen”と神による救済に大きな希望と期待を寄せている。この2つの表現もウィルヘルムの加筆である。捨てられた森の中から妹を救済する行動を起こしているのは求められている神ではなく兄自身であり，2日目には神の救済もなく兄妹は森に置き去りにされることからすれば，神は主人公の兄妹に対して効果的な救済の作用を及ぼしていない。また，囚われた魔女の家で妹の「神様！お助けください」“Lieber Gott, hilft uns doch”の呼び掛けも空しく，助けてくれる人もいなければ助かる手段も見出せない彼女に残されていることは，恐怖心に打ち勝つ強い意志と窮地からの脱出に向けての積極的な行動だけである。しかし，一見不必要と思われる神への呼び掛けは，兄妹が神を敬う敬虔で優しい心の持ち主であることを聞き手に印象付けている点では効果的と言えよう。この話の中核をなしているのは，彼岸の者や神の不可思議な力による救済ではなく，兄妹の忠実な助け合いなのである。

「灰かぶり」(KHM 21)の冒頭で母親が死に際に娘をベット際に呼び「愛する娘よ，いつまでも神様を信じて良い行いに心掛けるのですよ。そしたら神様はいつも助けてくださるよ。私は天から見守っておまえの傍に付き添っていますよ」“Liebes Kind, bleib fromm und gut, so wird dir der liebe Gott immer beistehen, und ich will vom Himmel auf dich herabblicken und will um dich sein”と最期の言葉を告げて

いる。神が窮地に陥った娘をいつでも助けてくれるのであれば，天国の母親は娘の傍に付き添っている必要がないのではなかろうか。この部分を初版で見ると「私が天に昇れば，おまえのことを天から見守り，何か困難に出会ったときには助けを送りますからね。だた，神を信じて良い行いに心掛けるのですよ」“wenn ich oben im Himmel bin, so will ich auf dir Hülfe schicken, nur bleib fromm und gut”と記されている。この初版に見られる叙述の方が第 2 版よりも行動に論理性があると思われる。つまり，娘が信心深く，心掛けを良くしていることを条件に，母親は娘への援助を約束している。そして娘が母親の提示した条件を満たした段階で初めて，語り手も聞き手も主人公と一体となって母親からの援助を予期し得るのである。

「盗賊のお婿さん」(KHM 40) では，寝ている盗賊をまたいで通過しなければならない困難な状況で「少女は彼らのだれか 1 人を起こしてしまうのではないかと大変心配でした。しかし，彼女が運良く通過できるように神様が助けました」“und hatte groβe Angst, sie möchte einen aufwecken. Aber Gott half ihr, daβ sie glücklich durchkam”と記されている。この場合，彼女を助けたのは神であろうか，それとも幸運であろうかの論理上の疑問が生じる。これに対して初版では「彼女はだれか 1 人を起こしてしまうのではといつも心配でした。だが幸いにもそのようなことは起きませんでした」“und immer war ihr bang, sie möchte einen aufwecken, allein es geschah zum Glück nicht”と神が介入することもなく，彼女が恐怖心に打ち勝つことで，目に見えない不可思議な力が作用して，心掛けの良い彼女に幸運が授けられており，論理の整合性が見られる。

「兄と妹」(KHM 11) の終結部は，「そのとたん，神様の恵みでお后は命を取り戻しました」“hatte in dem Augenblick durch Gottes Gnade das Leben wieder erhalten”とされている一方で，初版では，「彼 (王様) がお后に触れると彼女は生き返りました」“wie er sie anrührte, ward sie wieder lebendig”と神の登場はなく，メルヒェン特有の不可思議な行動だけが記されている。同様に「悪魔の緑の上着」(KHM 101) の終結部でも，熊の皮男は「神様の恵みで私は人間の姿を取り戻せたのだ」“durch Gottes Gnade habe ich meine menschliche Gestalt wieder erhalten”の表現は初版には見られない加筆である。熊の皮男が人間の姿を取り戻し，娘が生きることに目覚めるのも，神の恩恵ではなく，窮地の中で 2 人が互いに信頼し合った結果によるものである。また，「何も恐がらない王子」(KHM 121) では，大男に目をくり抜かれた王子が忠実なライオンの導きによって命の水で視力を回復するが「王子は神の恵みに感謝してライオンを連れて世界を遠くまで歩き回りました」“der Königsohn dankte Gott für die groβe Gnade und zog mit seinem Löwen weiter in der Welt herum”と叙述されている。神の恵みへの不必要な感謝の言葉によって命の水の持つ超自然の力の印象が薄れており，命の水の小川に導いたライオンを労う言葉もなく，論理性に欠けているようである。

第 2 版で「神の恵み」“Gottes Gnade”の語が頻繁に引用されていることから分るとおり，メルヘンの特性である超自然で不可思議な形象が随所で必要もなく神と置き換えられたり挿入されたりしている。それはメルヒェンに登場する不可思議な援助者は神の使者である，また，神は主人公の行動の主導者であるとの考えにウィルヘルムが基づいたためだと推測できる。しかし，この考えは彼の宗教教育的意図に合致するものの，メルヒェンの行動論理との矛盾を生じさせている。主人公や主人公と同行する聞き手にとっては，援助や救済の提供者が神であろうが誰であるかはさほど重要な意味を持っていな

い。メルヒェンの主人公は定められている方向に向かう行動の過程で，授けられる不可思議な力による救済に身を委ねているのである。とはいえ，救済者が特定の人間や動物の姿で出現したり，目にすることができない姿で出現することによって，本来無力な主人公がある種の強い力に付き添われて幸運を手にする話の展開は極めて宗教的であると解釈できる。

キリスト教的な描写

メルヒェンには様々なモティーフが互いに関わり合いながら混在していることから，キリスト教的要素だけを他の要素から切り離して解明するのは困難である。むしろメルヒェンのキリスト教的な要素は何に存在し，どこに見出されるのか，その箇所がどのように評価され得るのか，また，メルヒェンとキリスト教の関連や相違点はどこにあるのかを検証すべきである。

聖者伝説では，神は隠れた存在者としてではなく，天地創造の際の如く，天地の中心的人物あるいは副次的人物として登場しているが，メルヒェンにおける神の作用や影響はどのような形象として認められるのであろうか？ウィルヘルムは 1819 年の「メルヒェンの本質について」の論文の中で，メルヒェンが極めてキリスト教的であると主張しており，その例として「マリアの子ども」(KHM 3) を挙げている。その他，「歌う骨」(KHM 28)，「手なし娘」(KHM 31)，「なでしこ」(KHM 76)，「悪魔の緑の上着」(KHM 101)，「明るいお天道様が明るみに出す」(KHM 115)，「星の銀貨」(KHM 153) などもキリスト教的色彩の強い話として挙げることができる。そこで，「マリアの子ども」の話を中心に，キリスト教的要素が強いと思われる箇所を抽出して，メルヒェンモティーフとの関わりを初版と第 2 版の比較をとおして探ってみる。

○「マリアの子ども」(KHM 3)

話の冒頭に登場する木こりは，自分の 1 人の子供も養えないほどの困窮状況にある。ある日森の中で聖母マリアが彼の前に現れ「あなたは貧しくて困っているから，お子さんを連れていらっしゃい。私が引き取って母親となって世話をしてあげましょう」“du bist arm und dürftig, bring mir dein Kind, ich will es mit mir nehmen, seine Mutter seyn und für es sorgen” と言って彼の娘を天国に連れていく。マリアが旅に出かけることになり，少女に天国の扉の鍵を預け，13 番目の扉だけは開けてはならないことを伝えるが，少女は暗示にかけられたかのように禁じられた扉に引き寄せられ，好奇心を抑えることができずにその扉を開けてしまう。マリアとの約束を破る罪を天使が事前に少女に伝えて注意を喚起している叙述は，その後に少女が犯す罪を重大で絶対的なものとして聞き手に伝える必要性によると考えられ，第 2 版で付加されたものである。「すっかり開けようとは思わないわ，中に入ろうとも思わないわ。でも，少し隙間から見られるように開けて見たいわ」“ganz aufmachen will ich sie nicht, aber ein bischen aufschlieβen, damit wir durch den Ritz sehen”「ああ，いけません。そんなことをしたら，罪になるわ。マリア様がいけないとおっしゃったのだから。きっとあなたは不幸になるわ」“ach nein, das wäre Sünde, die Jungfrau Maria hats verboten und könnte leicht dein Unglück werden” と，不幸の訪れが天使によって事前に示唆されている。少女は扉を開けたことを認めることを恐れ，マリアの再三の問いただしにも白状することなく，嘘をついたことも否定し続ける。この行動は道徳意識に対してまだ明確な判断能力や処理能力を持たない子供の好奇心による無邪気な行為であり，不道徳な行動とは断言できない。それでも繰り返される誘導尋問で少女を嘘へと導くマリアによって少女は地上に戻され，声を発することもできない極端な厳しい罰を受けることになる。後になって

少女はある王と巡り会い后になる幸せを得るが，この幸せはその後に押し寄せてくる不幸を際立たせるための叙述に他ならない。マリアは，后が子供を出産する度に改めて彼女に罪を問いただして次のように戒めている。「罪を改めず，頑固に，そうでないと言うならば，生まれたばかりの子供を連れて行ってしまうよ」“verharrst du aber in der Sünde und leugnest, so nehme ich dein neugeborenes Kind mit mir” それでも彼女は頑なに己の罪を認めないために，生まれた 3 人の子供は罰としてマリアに召される。彼女は人食いの嫌疑をかけられ，言葉を発せられないため自己弁護もできずに火あぶりの刑に処せられる。燃える薪の上で「高慢の堅い氷」“das harte Eis des Stolzes” が融け，彼女の心が「後悔の念に動かされる」“von Reue bewegt” と，自身が助かるためではなく，この世の最後に一目わが子に会いたい一心から「せめて死ぬ前に，扉を開けた，とありのままに言うことができたら」“könnte ich vor meinem Tode gestehen, daβ ich die Thüre geöffnet habe” と全ての罪を認め白状しようとする。キリスト教の懺悔に相当するこの自発的な告白が明確に表明されてはじめてマリアが天から舞い降り「自分の罪を悪いと思い，ありのままに言った者は罪を許される」“wer seine Sünde bereut und eingesteht, dem ist sie vergeben” とイエスの慈悲を伝え，彼女を救済して幸福を与えている。少女の無邪気な行為はマリアの再三の戒めによって聞き手も納得し得る重い罪と化し，その贖罪として極端に重い罰が与えられている。そして長年にわたる贖罪を経て，彼女がようやく後悔の念を示したことで，キリスト教の倫理に則した慈悲が授けらている。「嘘によって事態は一層悪化する」という道徳的な教えは，話の終結部では「罪を悔い改める者は幸福を得る」という正にキリスト教の教えに発展している。

この話は第 2 版の改訂によって，主人公を中心とした主体的行動から生じるメルヒェンの教訓よりも聖母マリアの行動をとおしてキリスト教の道徳的教訓が意識的に特色付けられている。しかし一方では，改訂の際に印象的で文学的な不思議な出来事の描写が削除されたことでメルヒェンの特性を損ねてしまった面も伺える。その顕著な数例を以下に紹介する。

話の冒頭に出現するマリアの描写は初版では，貧しい木こりが森に行くと「突然彼の前に美しい女性が立っていました。彼女の顔の周りは明るい輝きを放ち，王冠は一杯の星でちりばめられ，空色の服には銀の星が覆っていました」“da stand auf einmal eine schöne Frau vor ihm, ein heller Glanz leuchtete um ihr Gesicht, sie trug eine Krone von lauter Sternen, und ihr Kleid war himmelblau mit silbernen Sternen besät” と記されている。空色，深紅色，黄金色，銀色の絵画的に描写されているマリアの姿からは，木製の奉納絵あるいは聖礼拝堂のガラス絵などに描かれている聖母マリア像を鮮明に思い浮かべることができる。これに対して第 2 版では「突然，背の高い美しい女の人が彼の前に現れました。輝く星の冠を頭に戴いていました」“stand auf einmal eine schöne Frau vor ihm, die hatte eine Krone von leuchtenden Sternen auf dem Haupt” と王冠以外のマリアの形容は極めて簡素化されている。また，初版では，天国から追放された後，荒野に囲まれた生活を送っている少女を王が発見する場面を「天国で着ていた深紅色のビロードの服に届くまでに金髪が伸びた少女は言葉を発することもなくたいそう美しい姿で座っていました」“seine goldenen Haare hingen lange herunter bis zu dem dunkelroten Sammetkleide, das es im Himmel getragen hatte. Und so saβ es still in unbeschreiblicher Schönheit” と描かれており，話の冒頭でマリアが木こりの前に現れた同じ装いで少女は王と遭遇しており，地上に

追放された後もマリアの子であることが強調されている。第2版では，メルヒェン形態の特性である「極端な対比」が導入されたことにより，少女は天国と完全に切り離され，擦り切れた服を着て闇にただ黙って座っている。その姿は「長い髪の毛がまるでマントのように四方から被さりました」“seine langen Haare bedeckten es von allen Seiten wie ein Mantel”と，家から追放された哀れな木こりの子として描かれており，王はその異様な姿に「驚いて」“voll Erstaunen”少女と対面している。人食いの罪をきせられて薪の上で火あぶりの刑に処せられる后の姿は，無実を確信している聞き手の心を捉え，当然の結末として待ち焦がれる救済への思いを高揚さる効果となっている。初版では「突如自ずと炎は消え」“das Feuer aber löschte sich von selbst aus”と燃える炎からの救済はあくまでもメルヒェンの特性である超自然的な不可思議な力が機能することによって実施されている。第2版の終結場面の描写の焦点は，薪の上の后にではなく，天から舞い降りたマリアの出現に向けられている。「とたんに空から雨が降り出し，燃え上がる炎を消し，后の上にはぱっと光が差し，マリア様が降りてこられた」“da fing der Himmel an zu regnen und löschte die Feuerflammen und über ihr brach ein Licht hervor und die Jungfrau Maria kam herab”突如降り出した雨が炎を消し，マリアが出現する救済方法は聖者伝説の不可思議さに従っており，救済の喜びよりも信心深さへの驚嘆が喚起されている。

ウィルヘルムは改訂にあたり，キリスト教的画像をそれとは異質であるメルヒェンの世界に取り入れたのではなく，民間信仰の形象や思想が生き付いている民間メルヒェンをキリスト教的な色合いの教育文学に書き換えたのである。しかし，元来キリスト教的色彩の強いこの話の場合，恐らくキリスト教的な考え方との整合性を意識し過ぎたことで，本来のメルヒェン的な特性が失われ，メルヒェンの前提である文学的な表現までも損ねてしまった一面が伺える。

○「星の銀貨」(KHM 153)：初版の表題では「哀れな少女」(Nr. 83)

主人公である哀れな少女は両親も家も寝る場所も失い，携えていた物は身につけている服と恵んでもらったパンだけとなる。初版の「そこで彼女は野原へ出て行きました」“da ging es hinaus”に対して第2版では，「神様をたよって」“im Vertrauen auf dem lieben Gott”が付加されている。歩み行く方向・目的がより明確に示されて，いずれ遭遇するであろう神の助けが暗示されていることで聞き手の不安と心配が幾分和らげられている。また，出会った男に最後のパンを与える際に「神様のお恵みがありますように」“Gott segne Dir's.”の表現も付加されている。次に出会う4人の貧しい子供たちに身につけている物を順次提供し終えると，突然空から銀貨が舞い落ち，幸せを得る結末となっている。少女の振る舞いは，褒美や代償のことを考えることなく全く無私の行為によるものであり，人のために己の命も犠牲にする覚悟を備えている。その良心と善意の結果として最後に幸せを手にしているのである。想像を越えた出来事は先ずは，空から星が降るという聖者伝説特有の不可思議さで発生し，続いてそれが銀貨となって哀れな少女が裕福になるというメルヒェン的な超自然の現象に発展している。この場合，神を示唆する前述の2つの加筆はメルヒェンの進行にとって不必要とも思えるが，キリスト教的な教えを含んでいるこの話の進行を妨げるものでもなく，メルヒェン形態に相容れないものでもないと思われる。

旧約聖書のメルヒェン的モティーフ

旧約聖書の中にも主人公が人間の言葉を話す動物に遭遇したり，超自然的で不可思議な行動

などのメルヒェンモティーフに極めて近い，類似する話が見受けられる。とりわけ顕著な例は士師記第 11 章に収められているエフタの物語に見られる「我が子を生け贄に捧げる」モティーフである。このモティーフの本質は変化することなく伝承され，以降，多くのメルヒェンの導入部に再現され，重要なメルヒェンモティーフの１つとして根付いている。エフタの物語に見られるこのモティーフを旧約聖書から抜粋し，メルヒェンモティーフとの類似点と相違点の比較について解説する。

妾腹ゆえに異母兄弟から相続権を奪われ国外追放された主人公のエフタは，後になってアンモン人への戦いを指揮するために同郷の人達に呼び戻される。エフタは大事な戦いに臨むにあたり，神に「もしあなたがアンモンの人々を私の手に渡されるならば，私がアンモンの人々に勝って帰るときに，私の家の戸口から出てきて，私を迎えるものはだれでも主のものとし，その者を燔祭として捧げましょう」と誓願を立てる。戦いに勝利して家に戻ると，１人娘が家から出て鼓を持って舞を踊って彼を迎える。「父よ，あなたは主に誓われたのですから，主があなたの敵アンモンの人々に報復された今，あなたが言われたとおりに私にしてください」と娘は父親の神への誓願に従って本当に生け贄に捧げられて死ぬ。彼岸の者と取り交わした約束に従って自分の子供を生け贄として捧げるこのモティーフはメルヒェンにも多く見受けられる。

○「手無し娘」（KHM 31）

貧しくなった粉屋が出会った老人との「水車の裏にあるものをくれると約束するなら，金持ちにしてあげる」“ich will dich reich machen, wenn du mich versprichst, was hinter deiner Mühle steht”の提案を受け入れる。粉屋はそれが林檎の木と思っていたが，すぐに自分の娘であることが判明する。粉屋に謎めいた話を持ちかける老人は前掲のエフタの場合とは異なり，ここでは悪魔なのである。３年後に悪魔が娘を連れに現れると父親は娘に「おまえの両手を切り取らなければ悪魔は私を連れて行くんだ。私は恐ろしくてそうすると約束してしまった。困っているお父さんを助けてくれ」“wenn ich dir nicht beide Hände abhaue, so führt mich der Teufel fort, und in der Angst hab ichs ihm versprochen, ich bitte dich um Verzeihung”と懇願する。娘は快く父親の願いを聞き入れて父親に両腕を切り落とさせ，世を渡り，天使が堀の水門を閉めてくれたので堀を通り抜けて城の庭に入る。この光景は，イスラエルの隊列が紅海を渡るモーセ第１章を彷彿させている。やがて娘は王と結婚するが，悪魔の悪巧みにあって城から逃れる。話の結末では，７年間彼女を探した王と再会し，失われた両腕は「恵み深い神様が生まれつきの手をまた生えさせてくれました」“die natürliche Hände hat mir Gott wieder wachsen lassen”と再生され，父親の犠牲になった主人公は幸せを手に入れる。

○「金の山の王様」（KHM 92）

財産の全てを失った商人が畑で小さいな黒い小人に出会う。彼は望むだけの富と引き換えに「家に帰って最初に足にぶつかるもの」“das, was dir zu Haus am ersten widers Bein stößt”を 12 年後にこの場に持ってくるという謎めいた約束を小人と交わす。それは彼の考えていた犬ではなく，彼の小さな息子である。この子が 12 歳を迎えると黒い小人，他ならぬ悪魔が現れ，父親と少年に約束の実行を迫る。悪魔の譲歩で川に小舟で流された彼は，やがて王宮に流れ着き，城の中で蛇に姿を変えられている姫の呪いを解き，やがて彼女を妻にして金の山の王座に就き幸福を得る。

○「池の中の水の精」（KHM 181）

貧しくなった粉屋が途方に暮れて水車場の土手を歩いていると水の精が現れ「もし家で新しく生まれたものを」“was dir in deinem Haus

jung geworden ist”差し出す約束をするなら富と幸福を提供する案を持ちかける。粉屋は恐ろしさのあまり妻が身ごもっていることをすっかり忘れ，それが多分犬か猫の子だと思い約束を交わす。彼が家に戻ると妻が男の子を産む。子供は成長し，やがて結婚する。ある日，彼が池の辺に来ると水の精が現れ，彼を水の中に引き入れる。長い年月を経て，忠実な妻が彼の呪いを解き池から救出して2人は平和を取り戻す。

○「歌って跳ねる雲雀」(KHM 227)

旅人が愛娘への土産として1羽の雲雀を捕らえるが，この雲雀の所有者であるライオンと命の恐怖から「家で最初に出会うもの」“daheim zuerst begegnet”を提供することを約束する。家で最初に出迎えた娘がその約束を聞かされると，ライオンの元に行くことを気にも留めずに明るく承諾する。このライオンは悪魔ではなく呪いを受けた準主人公の王子であるが，約束を交わす段階では，対面する父親ならびに聞き手にとっては悪い恐ろしい獣に他ならない。やがて彼女の愛がライオンを呪いから解放してハッピーエンドを迎える。

この4つの話に登場している父親たちは，先に述べたエフタ同様に，困窮あるいは苦境の状況に直面している。その状況に置かれているが故に最初は暗号的で謎めいた対応者の申し出を受け入れて約束を交わす。しかし，すぐにそれが彼らの娘や息子であることが判明する。そしてこれらの対応者が父親たちとの協定，つまり，代償として富と幸福を提供することを守ることから必然的に彼らも約束を果たさなければならない状況に置かれる。一方，娘や息子たちは父親たちの愚かさに憤慨することも抵抗することもなく，犠牲となって引き渡されることに躊躇することもなく快く従っている。

エフタの物語のモティーフが上記に示すとおりメルヒェンに受け継がれているものの，そのモティーフの展開は次の点で大きく異なっている。第1に，メルヒェンでは父親たちが遭遇して約束を交わすのは神ではなく悪魔であり獣であるため，聞き手の神に対する信頼が保持されている。第2に，犠牲になる罪のない子供たちが話の主人公である。メルヒェンの主人公は多くの場合苦境に置かれることによって聞き手の注目を集め，同情心を駆り立てている。そして第3に，生け贄に晒されたこれらの主人公たちが多くの苦難を経た後に，悲劇的な死ではなく幸せな結末を迎えていることである。

エフタのように無条件に神を信じている人間は，神と交わした約束を守るために自分の子供さえも犠牲にする行為を躊躇してはならないと考えている。しかし，メルヒェンの聞き手は，このような残酷な行為を神が人間に求めていることに抵抗を感じ，むしろこのような約束が神の意思ではなく悪魔の企てであると信じている。同時に，富に目がくらんだ理不尽な父親に比べ全く罪のない娘が実際に犠牲となることにはなおさら納得ができないのである。エフタの物語のモティーフがハッピーエンド型に加工・再編されたグリムメルヒェンは，語り手と聞き手双方の理解と賛同を得ており，最後に神の恵みで失われた両腕が元に戻る「手無し娘」の話などは，とてもキリスト教的な内容を持つメルヒェンであると言える。

福音書の説く「幸福」との比較

「マリアの子」の話のように，キリスト教的要素が強く，神の姿やキリストの形象がはっきりと認められる話はグリムメルヒェンでは極めて限られている。多くの場合，神の援助を求める行為はさほど深い意味を持たずに実行され，その叙述も話の展開にとって重要ではなく，ウィルヘルムのキリスト教志向による装飾的な書き換え，書き足しに他ならないと解釈し得る。しかし，メルヒェン行動には宗教的に特徴付けられる観念，つまり，主人公が幸福への途上にお

いてある種の強い力に付き添われるという観念が根底にある。主人公だけが幸せを手にするとき，この幸福は神の援助のお陰でも自身の能力によるものでもなく，彼の隣人愛や親切心，無私の行動，いわゆるキリスト教的行動様式で勝ち得た不思議な援助者のお陰による場合が多い。このようにメルヒェンにおける幸福の捉え方とキリスト教に基づく幸福には共通点もあれば相違点もあるようである。

幸せの福音はマタイによる福音書第５章では８項目，ルカによる福音書第６章では４項目記されている。メルヒェンにおける幸福の形態と比較するに際して，まずはそれぞれの福音書を以下に引用する。

○マタイの福音書における幸せ

マタイ①＝心の貧しい人たちは，幸いである，天国は彼らのものである。〔ルカ①＝あなたがた貧しい人たちは，幸いだ。神の国はあなたがたのものである。〕

マタイ②＝悲しんでいる人たちは，幸いである，彼らは慰められるであろう。〔ルカ③＝あなたがた今泣いている人たちは，幸いだ。笑うようになるからである。〕

マタイ③＝柔和な人たちは，幸いである，彼らは地を受け継ぐであろう。

マタイ④＝義に飢え乾いている人たちは，幸いである，彼らは飽き足りるようになるであろう。〔ルカ②＝あなたがた今飢えている人たちは，幸いだ。飽き足りるようになるからである。〕

マタイ⑤＝哀れみ深い人たちは，幸いである，彼らは哀れみを受けるであろう。

マタイ⑥＝心の清い人たちは，幸いである，彼らは神を見るであろう。

マタイ⑦＝平和をつくり出す人たちは，幸いである，彼らは神の子と呼ばれるであろう。

マタイ⑧＝義のために迫害されてきた人たちは，幸いである，天国は彼らのものである。〔ルカ④＝人々があなたがたを憎むとき，また人の子のためにあなたがたを排斥し，ののしり，汚名を着せるときは，あなたがたは幸いだ。〕

上記で説かれている幸福が，心の行動なのか社会の境遇なのか，精神的な貧しさなのか身体的貧しさなのか，義に対しての飢えなのか身体的な飢えなのか等の疑問が生じる。福音書の言質を取れば，それらのどちらかではなく双方を含んでいる。世俗的な貧困と精神的貧困，身体的飢えと精神的飢えは関連していると考えるべきであろう。貧困であること，飢えていること，苦痛を抱いていることや迫害を受けていることは決して至福のための担保ではないが，有用な前提条件である。貧困な人間は裕福な人間よりも早く精神的貧困状態に達し，飢えている人間は満ち足りている人間よりも早く義の飢えに達するとしている。マタイに見る幸せの福音③，⑤，⑥，⑦は明らかに，優しい心，哀れむ心，純真な心，平和を愛する心といった人間の内面的な大切さを挙げている。

人間が幸せと称賛されるこれら①～⑧の特性はメルヒェンの主人公たちが幸運を得るために備えている能力と多くの点で一致しており，話の展開の主軸をなす重要なメルヒェンモティーフである。このことから，メルヒェン道徳とキリスト教的道徳は同義ではないものの共通する部分が多く，双方は密接な関係にあると言える。Solms の分析に従って以下に解説する。

「貧乏人とお金持ち」(KHM 87)や「星の銀貨」(KHM 153) をはじめ多くのメルヒェンの主人公たちは極めて貧しい状況に特徴づけられている(幸せの福音①)。しかし，彼らが最後に幸せを手にする要因は，彼らの貧しい境遇が故にではなく，彼らの哀れみ深く同情的な行動である(幸せの福音⑤)。「鵞鳥番の娘」(KHM 89)や「泉の傍の鵞鳥番の女」(KHM 179)，魔法で兄たちが 12 羽の白鳥や 7 羽の烏に変えられてしまう主人公の娘たちは，自分たちが置かれている苦難な状況を嘆くこともなく，また，行く手を阻

む悪い加害者たちを責めることもなく，定められた悲しみの期間が経過するまで忍耐強く辛苦に耐え続けている（幸せの福音②）。あの美しい白雪姫は，猟師や獣や小人たちをはじめメルヒェンの語り手と聞き手の同情心を惹き起こしているが，それは継母に比べて外観的に美しいからだけではなく，内面的な美しさ，つまり，清い汚れのない心を備えているからである（幸せの福音⑥）。また，継母の悪い企みに対して悪意を抱くこともない。「金の鳥」（KHM 57）と「命の水」（KHM 97）の主人公も清い心の持ち主であるため，妬み心の強い兄弟たちの行為に対する敵対心も悪い感情も抱いていない。「白雪姫」（KHM 33），「森の中の 3 人の小人」（KHM 125），「恋人ローランド」（KHM 56）などの多くの主人公の女性たちは，何も悪い行為をしていないのにも関わらず，継母や姑たちからの迫害を受けている。その迫害を受けているが故に彼女たちは幸せを要求する権利を有しているのである（幸せの福音⑧）。しかし，彼女たちは義のために迫害を受けているのではなく，例えば，継母が自分の娘のために手に入れようと目論む幸せのために迫害を受けているのである。「金の鳥」（KHM 57）と「命の水」（KHM 97）の愚かな主人公は，途中で出会う動物たちや年老いた小人に対して，心優しく「柔和に」穏やかに「平和に」対応している（幸せの福音③，⑦）。主人公たちと彼らの加害者が行動の過程で示す特徴は，多くのメルヒェンにおいて似通った共通の徳と悪徳，謙譲と高慢，利他主義と利己主義などの対照をなしている。この対照こそがキリスト教の重要な世界であることから，メルヒェンがキリスト教の福音と極めて近い関係にあると言える。

キリスト教の教義との相関性

幸せと称賛される者に対してはキリスト教の教えに基づいた至福が約束されている。メルヒェンの主人公たちも，この教えに極めて近い特徴に基づいて幸せを手に入れている。福音書では「幸せであること」「至福であること」は確定的なことではなく約束・予言されることであり，思いやりを持ち平和を好むことを人間に求め，それを成せば神の子になることを予言している。また，貧しい者や迫害を受けている者は，神の庇護を信じて耐え忍ぶことが大切であり，そのことによって困難な状況から開放されることを予言している。到来する神の国を信じ，幸せの福音に達することに努める者は彼岸のみならず此岸でも精神的な幸せを感じ得るのである。

幸福を予言するイエスや説教者たちと同様に，メルヒェンの語り手は，主人公が幸せを手に入れることに対して聞き手に疑念を抱かせることはない。キリスト教では，幸せの福音における「神の国」は来世や未来に到来する，あるいは現世でその始まりが認められるとしているが，メルヒェンにおける神の国はハッピーエンドという典型的な現実的形象で示されており，幸福は主に此岸の生活で到来している。また，福音書で予言されている幸福が神への信仰を前提として，天国もしくは神の国に関連している一方で，メルヒェンに表されている幸福は信仰心に拘束されることなく，美しい姫との結婚により王国を受け継ぎ権力と富に到達するなどの現世的で物質的な特徴を持っている。

主人公特有の行動から生じるメルヒェンの教えは，キリスト教の説く教えと類似してはいるが同一視することはできない。メルヒェンの主人公の進路を阻む加害者は，悪事の大小にかかわらず，極めて厳しく残酷な処罰を受けている。この残酷さに対して語り手と聞き手の同意が得られていることは，彼らへの処罰が語り手によって道徳的に正当化されているからであろう。福音書には，「幸せの福音」に続いて「敵に対する愛」について「敵を愛し，憎む者に親切

にせよ。呪う者を祝福し，辱める者のために祈れ」と説かれている。メルヒェンにおいては，主人公自らが悪行を働いた敵を裁いたり罰したりすることは稀であるが，悪人は必ず滅びる勧善懲悪の図式となっている。多くの場合，主人公に代わり悪を裁いているのは，例えば王であったり，悪行を働いた本人自身である。

キリスト教の教えでは，神は必ずしも善人に報い，悪人を罰しているわけではなく，正当な人間と不当な人間の双方に恩恵を授けることができる。キリスト教徒は，モーゼの十戒ならびにイエスの隣人愛の戒律に準拠して，最終的に己を当てはめることができる明確な基準を持っている。それに対してメルヒェンの主人公は特有の行動を遂行することによって，定められている幸福を得ている。この場合，正しい行動が求められているものの，必ずしも道徳の戒律に従って行動しているわけではなく，自身の本能や心の声に従った行動をしている。そのため，笑い話や動物笑話的なメルヒェンには極めて非道徳的な行動をする主人公さえも登場している。また，キリスト教的な信心深さの表象は，神やキリスト，聖母マリアやペトロが人間の姿で登場する聖者伝説においてのみならず，メルヒェンにも多く見受けられる。しかし，このモティーフも決してキリスト教の教えや型に捉われているわけではなく，話の中で展開されている民間の信仰心はキリスト教のものとは異なっている。そのため，極めて宗教的な要素を多分に含んでいるメルヒェンであっても，キリスト教の教義や理念だけで解釈することは困難である。

おわりに

キリスト教が贖罪を説いているものの，度重なる宗教戦争をはじめ様々な戦争において重要な国家的役割を担ってきたことで，人と人，国と国との平和的な関係に軋轢を生み出し，道徳に反する行為で不幸な事態を招いた史実がある。一方，メルヒェンのメッセージは幸福であり，それも多くの場合，主人公が徳を備えた行動によって得た道徳的な幸福である。その道徳的なメッセージが聞き手の期待に合致していることからメルヒェンは広く大衆に受け入れられている。聞き手は，主人公が最後に至福や富を手にすることをこの世では起こりえない非現実として捉えながらも，その状況を夢想し，仮にそうなれば素晴らしいという強い思いを抱いているのである。そのためメルヒェンは非現実的で空想的な御伽噺としてだけではなく，ある種の宗教的な救い，人生の救いとなるものとして捉えられている。そしてキリスト教的な要素をはじめとしたモティーフの多様性を機能させ，比喩的な言葉を巧みに用いた描写をとおして，全ての人種や文化ならびに宗教の下で共有し得る喜びや勇気，希望や慰めを聞き手に与え続けると同時に，異なった社会層や文化圏を越えて広い影響力を持っているのである。

文　献

1）〔テキスト〕Wilhelm Solms (1999) Die Moral von Grimms Märchen. PRIMUS VERLAG, 175-192

2）〔初版〕Brüder Grimm (1812) Die Kinder- und Hausmärchen. EMIL VOLLMER VERLAG

3）〔再版〕Brüder Grimm (1819) Kinder- und Hausmärchen Bd. 1･2. EUGEN DIEDERICHS VERLAG

4）〔決定版〕Wilhelm Straub (1950) Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Verlag Herder

5）高橋健二訳（1976）グリム童話全集Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ．小学館

6）日本聖書教会（1964）口語聖書．旧約聖書 1955 年改訳 356-359，新約聖書 1954 年改訳 5－9，93-95

7）宮田光雄（2004）メルヘンの知恵．岩波新書，142-154